

■ 報告者：野澤美知雄（栃木県真岡市立山前中学校教諭）

□ 調査日：2004年8月2～8日

## 1 プロジェクトの体験から学んだこと

### 仕事の概要

(1) オクサ湿原のフィールドステーションを中心とした7エリアに長さ200m程度の霞網を設置し鳥を捕まえる。朝は、1つの網に30羽近くかかっていることがあり、取り外すのに非常に時間がかかる。取り外した鳥は、個々の袋に入れフィールドステーションに持ち帰る。この霞網のチェックや鳥の取り外す仕事が私たちボランティアの主な仕事であった。鳥がもがくので羽や足がネットに絡まり、取り外しに時間がかかる時があった。また、攻撃的な鳥（啄木鳥や四十雀）にも時間がかかったが、ボランティア後半には慣れてきた。私たち以外に周辺の中、高校生のボランティアもおり、各エリア2人から4人で交代でチェックを行った。チェックは1日8回（午前4回、午後4回）行った。

### エリア

**House**・・・フィールドステーションの北側、一番人間の住む場所に近い。よし、あしがほとんど。

**Forest、ElderBerry**・・・フィールドステーションの南側の森、ElderBerry が多い場所。

**Reed**・・・よし、あしの湿原。

**Long、DryReed**・・・南側の森と、よし、あしの湿原の中間の場所。よし、あしが多い。

**Dam**・・・フィールドステーションの西側でダムに近い場所。いろいろな木々が混在している。

\* 餌や巣を作る関係でエリアで取れる鳥が違うことに気づいた。後でわかったのが鳥のテリトリーがあるらしい。



## (2) 捕まえた鳥の情報を記録

ティボール教授が鳥の足にリングをつけ、鳥の情報をチェックする。チェックされた情報は、克明にノートに記入する。チェック項目は1から9の番号で分類しており、後でコンピューターでデータ処理をするらしい。ノートの記入は大学生や助手の仕事となっており、いない場合は、何回かこのボランティアの経験がある人が行っていた。

### チェック項目

- ・ 鳥の名前
- ・ 羽の長さ
- ・ 尾の長さ
- ・ 羽毛の生え変わり（若鳥か成鳥か）
- ・ 腹部の筋肉や脂肪のつき方
- ・ くちばし、舌
- ・ 体重
- ・ どのエリアで捕まったか



- \* リングがついている鳥が何度も捕まえられ、ある程度のテリトリーがわかるらしい。
- \* 渡り鳥になって、イタリアやアフリカで捕まえられた時、オクサにいたことを証明するためにリングをつけるらしい。オクサで捕まえられる鳥の中での数%は3年程度、アフリカとオクサを行き来しているらしい。それ以上は見つかっていないが、例外でただ1羽、12年前の鳥が見つかったらしい。
- \* このチェックの場所に皆が集まり、羽の形、色、くちばしの形や、脚の形などからなんという名前の鳥か予想する。ティボール教授が似ている鳥を比べ、見分け方を教えてくれる。

\* ティボール教授は非常にフレンドリーである。冗談を交えながら、いろいろ教えてくれた。特に、お酒が入ると、鳥の研究や環境について熱く語っていた。

### (3) 霞網の管理

霞網は日ざしが強いと劣化してしまうということで、12:30ごろに一度クローズし、夕方の17:00ごろにオープンする。雷などで風雨が強いことが予想される時はその時点でクローズする。(木の枝が風で折れ、ネットを破ることがあるため。) 私がボランティアを行った期間では雷が一度だけあり、夜までネットを開けなかったことがあった。これも、ボランティアの仕事で、ゴムで張ってあるネットを支柱にあわせて、上下に動かすだけなので比較的簡単だった。

### (4) 食事の用意

ネットをクローズしている時間はフリーなので、食事の準備などの手伝いをした。ほとんどの準備は、まかないの人がやってくれたが、ボランティアの高校生たちとジャガイモの皮むきや食器の準備や後片付けなどを手伝った。高校生たちと片言の英語で会話をした。(ハンガリーの教育制度や流行していること、日本の紹介)

\* 私自身、ハンガリーのことはほとんど知らなかったが、高校生たちは、日本の歌手やアニメ、柔道などをよく知っていた。そればかりでなく、高校生の一人は、日本語の塾に通っており、片言の日本語を話すことができた。日本から遠く離れたところで、日本の影響力を再確認できた。

## 学んだこと、感じとったこと

(このプロジェクトに参加することで)

- (1) 作業自体は非常に簡単な作業であるが、ボランティアがいなかったらこの研究は成り立たないということを実感した。そして、ほんの少しではあるが科学データベースづくりに貢献できたという充実感が得られた。
- (2) 特別な専門知識を持たない私が、一流の研究者(ドクターティボール)から直接話を聞くことで、知的刺激を受けた。普段何気なく見過ごしていた鳥や自然について考えるようになった。特に、オクサナショナルパーク(鳥を取り巻く)の環境保護についてのあり方を情熱的に話をしてくれたので、日本での取り組みはどうなっているのか興味がわいた。
- (3) ドクターティボールが周辺の中、高生をボランティアとして受け入れることによって、未来を担う若者に、命とそれをはぐくむ環境の大切さをさりげなく教えていた。このことも、環境を大切にする人のネットワーク作りのひとつであると説明していた。こういった取り組みの必要性を日本の教育の現場で呼びかけていきたいと思った。
- (4) ハンガリー人、アメリカ人、カナダ人、ブラジル人、台湾(バングラディッシュ人)と共同作業や生活をすることによって、自然な国際交流ができた。そして、グローバルな考え方の必要性を痛感した。また、日本のよさ(アニメ、工業製品、自然など)を再認識することができた。

## 2 今回の体験が学校教育にどのように意味を持つか。

### (1) 環境教育について

教員である私自身が、この体験を基に総合的な学習の授業を行うことにより、生徒に感動を与え、今まで以上に知的好奇心を刺激できると思う。また、この経験を通していろいろな人とのネットワークが構築されつつあるので、よりよい授業の模索ができると思う。そしてなによりこの授業で培った力を、他の教科や領域における環境教育に生かしていければ、今まで以上に、環境教育の目標に近づけるのではないかと思う。

### (2) その他

私が授業を行うことについての学校教育への影響は微々たることと思われるが、教師間の情報交換や体験の共有することで、授業の質が高まったり、教師の資質が向上したりすることは、結果として学校教育への影響が大きいと思う。また、「アースウォッチのプロジェクトではこんな取り組みをしているんだ。学校教育にはこんなメリットがあるんだ。」と教育行政機関への情報発信やアドバイスをし続けることにより、教育行政が少しずつ変化すると考えると学校教育への影響は大きいと思われる。



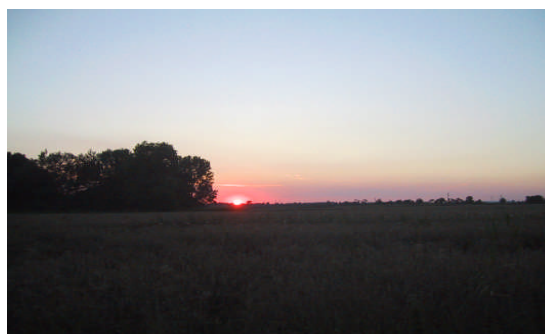
食事の風景



ボランティアで記念写真



フィールドステーション



オクサの夕焼け